



雲晴

春彼岸号

「雲晴」第十号

平成二十六年三月一日発行

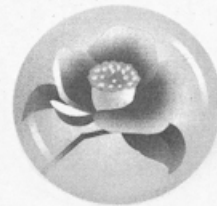
貞林院 瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五-四六-一五
電話(〇三三) 三六二七-三四一五
FAX(〇三三) 五六九九-五九一五

おしえの花束

何かの無駄をしてたのし

人はみな何かの無駄をしてたのし



ばどんなものでしょうか。

鈍行でゆつくりと、ときおり小さな駅で降りてみたり、知らない町を歩いてみたり、回り道をしながら終着駅につく旅。

これに似た人生であってこそ楽しいのだと思います。

「ああ、私はなぜこんな無駄なこととして生きているんだろう」と悩んでいたのでは、ますます大切な人生をつまらなくしてしまうのであって、「無駄」を楽しむゆとりを持つことが必要だと先の川柳は教えています。

自分では無駄なことをしているとばかり思い込んでいたことが、他の人から見れば、何てすばらしい人生を送っているんだろうとうらやまれていることだってあるんです。良寛さんが大好きだった句があります。

裏を見せ表を見せて散るもみじ

裏は人生の悲しみや苦しみ、表は幸せな喜びに満ちた人生、同じ人生のなかにどちらも必要であって、それでこそあの美しいもみじのような色合いが生まれるのですね。どうぞ、無駄をして楽しんでください。

こんな川柳に出会いました。なかなか味わい深い川柳だと思います。

近ごろの世相は何ともせちがらく、ガツガツ働いてすぐ損得を計算するだけの生活、あるいは無駄なことだと簡単に判断して結果だけを求めてしまいます。これだけではあまりにも味気ないのではないのでしょうか。

囲碁に捨て石というのがありますが、人生にだって無駄があってもいいと思います。無駄があつてこそ、ほんとうに味のある人生だと思います。

新幹線のようにいつときもとどまることなく無駄もなく、終点まで突っ走るだけの人生なら

心に病いをもち死を考えている人があなたに相談に来たらどうしますか。ある調査の問い掛けです。こんな深刻ではないのですが、私も人生に行き詰った人、また家族や家庭等での悩みを

●唯我独尊●

西門寺住職 鳥崎義宣

聞く事があります。その時相手の話をしっかりと良く聞いてあげる事にして

おります。誰れかに話を聞いてもらう事で、心の中に溜っているうつぶんを吐き出す事が大切であると、専門家も

云っております。特に自殺は残念ではありません。特にこの頃は若者の自殺も増えているとの事。私達の人生最大の目的は息を長らえる事でありませう。地位や名誉は後から付いて来るものであり、長生きする事が最大の目的でありませう。

お釈迦様はお生れになった時、七歩あるいて「天上天下唯我独尊」と云われました。直訳すると、この世の中で

ただ私一人が尊いと訳されますが、これは後世のお弟子達が釈尊が一生をかけて生命の大切さを説かれた事を、この言葉に託したわけでありませう。

三月十八日からは春の彼岸です。彼岸の一週間は仏教徒の修行の期間であります。

お寺(菩提寺)へ行つて下さい。そして阿弥陀様にお会いし、ご先祖様の墓前で感謝の意をあらわして下さい。また四月八日は釈尊降誕会でもあります。お近くのお寺さんでお釈迦様にもお詣りして下さいね。

民話の宝箱

首なし地蔵

●無限の母ごころに

むかし むかし あったとや

くねりくねり山道ゆくと ちょうど峠のてっぺんに地蔵さまがあったとや 石の地蔵さまどっしりでんとお立ちだ

が なしてか首がなかったとや 首がなくても 村人は 山しごとのゆきかえりかならずおがんで通ったとや さあて 峠の地蔵さまなして首なしに



なったのか そのわけこれからきかせてやるべ

ずうつとずうつと昔のことお前たちのじじいのじじい そのまたじじいがわらしのころだ それはひどい年だったとや

はるになつても 雪きえなくて やつとこ田植おわつてもおてんとさま 照らなくて そのまま さむい夏になつても いつまでたつても稲そだたなか

つたとや 田んぼだけではなかつたことや畑の豆もだいこんも うりも かぼちゃも にんじんも芽がでたつきりそれつきりしなびてしまふばかりだったと そうしていきなり冬がきたとや稲がとれない田んぼにも なにもみられない畑にも どつきり もつきり雪つもつて 北風びゅうびゅう吹きあれてほんとにひどい冬だったとや 食うものといえ草の根っこ 木の根っこそれだつていつかなくなるし しかたなく男たちは出かせぎにいき 女わらし 年よりたちは息つめてくらして たんだとや 山は 毎日ごーごーほえていたと その中で ひとり 峠の地蔵さま むねまでうもれてだまつて立つておいでたとや

一口法話



ともに生きる

さへられぬひかりもあるををしなえて へたてかほなるあさかすみかな (障られぬ 光もあるを おしなべて 隔て顔なる 朝霞かな)

これは法然上人のお歌とされています。春の早朝、遠くの山に目をやると、帯のようなぶ厚い朝霞が、太陽の光をも通さぬとたな引いているかのように出ています。しかし、阿弥陀さまの救いのみ光だけは、どれほど遮りがあるうとも、通りぬけて私たち人間を照らし出して下さいます。どれほど身勝手な煩惱に包まれていようとも、照らし出し、決してあなた一人で生きていくのではないと気づかせて下さいます。

元プロ野球選手が少年野球教室に招かれてキャッチボールを教えた時、皆バラバラ、ボールをあっちへ投げたり、こっちへ投げたり、投げられた方ももちろん捕れません。その時の彼の「踏み出す足を相手に向けて



「去此不遠」 貞林院瑞正寺 住職 林 清方

めずらしく 朝からはれた日のことだ
つたとや
ひるすぎに また空暗くなって北風ひ
ゆうひゆう泣きだしたがちようど峠の
ま下で声 したとや

「たすけてけろー」って
なんとしたことか 旅すがたの母さま
とわらし だきあってふるえてる
ふるえるはずだ なんともおつかない
ケダモノがおそいかかってきたんだと
もう何日もくうものなくて すっかり
腹をへらしたケダモノ 母さま わら
しを守って必死にたたかう 力つきて
母さま ケダモノにくわれそうなのを
見て わらし思わずさげんだとや
「とうちゃーん」て

わらしと母さまは 出かせぎにいつて
いるお父に会いにゆく途中だったんだ



とや 峠で わらしがさげんだ その
とき 何だかひどくむなさわぎばして
お父は急いで帰ることにしたとや
しかし もうまにあわない 体中きず
おつて 母さま息もたえだえ わらし
をだきよせたとや もうしまいだ
そのときだとや おそろしい風わきお
こった そして なんと地藏さまの首
くろい空にまい上がった まい上がっ
てケダモノめがけてつっこんだ
あぶないとこで母さまとわらし 命び
ろいをしたんだとや
親子三人それからはながくしあわせに
くらしたと
そして 首なし地藏さま みんなから
あがめられるようになったとや
お前さまの近くにも 首なし地藏さまおい
でになるべ (岩手県 北土舎より)

この書体は金文というもので、
中国の殷代(紀元前千六百年頃)
の古い字です。青銅器に彫られた
もので、最古の漢字と言われる甲
骨文字が鋭角的であるのに対し、
金文は柔軟で曲線と直線の組み合
わせにその妙があります。

「去此不遠」という言葉は、浄
土宗の根本経典の一つ「観無量寿
経」の中に出てくるもので「阿弥
陀佛去此不遠」すなわち「阿弥陀
佛はここを去ること遠からず」と
お釈迦様はお説きになっています。

彼岸の中日は、太陽が真西に沈

みます。落日の彼方の西方浄土を
想いお念仏を称えるのが彼岸の行
事です。「極楽浄土は遠く、阿弥
陀様は随分離れた処にいらっしや
るなあ」と思いがちです。しかし
そんなことはありません。阿弥陀
様はいつでも浄土から私たちを見
守って下さり、お念仏の声を探し
て聞いております。彼岸と此岸(

私たちがいる世界)はお念仏とい
うご縁を頂くことで距離が縮まり、
阿弥陀様はとても身近な親しい関

係になれるのです。

もう一つの根本経典である「阿
弥陀経」には「西方十万億の佛土
を過ぎて世界あり、名付けて極楽
という」の一文がありますが、お
念仏によって浄土が決して遠い処
ではないことがお分かりになった
と思います。

阿弥陀様の願力を信じ、一念称
名して西方浄土に即得往生するこ
とを説かれている「観無量寿経」
にあるこの「去此不遠」の信心を
どうぞより深めて下さい。

投げなさい」との一言で、すぐにボ
ールは相手の胸もとに。まわりの人
が感心すると、彼は「いいえ、球を
受ける相手がナイスボールと声を出
してはじめて、ともに野球をしよう
とする大事な心が生まれ、育つので
す」といいました。
私たちは、相手を思いやることで
この人間社会を形成しています。実
際には中々上手くいきませんが、そ
んな時、私たちが平等に救って下さ
る阿弥陀仏のみ光を心に思い、どう
ぞ南無阿弥陀仏とお称え下さい。そ
うすると、他者を思う大事な心が育
ち、私一人で生きるのはない、阿
弥陀仏さまとの共ぐらしがかなって
いくのです。
(総本山知恩院布教師会ホームページより)

春の彼岸法要のご案内

春の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

三月二十一日(金) 正午より

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

塔婆料 三千元
回向料 志納

「菽水清秀書展」を開催

毎年秋に開催している書展が昨年も十月二十九日から十一月三日まで東京銀座画廊で行われました。先代林錦洞が主宰していた本会の書展は銀座で開催するようになり、一昨年で五十年を迎えました。先代亡き後もお弟子さん方のご協力により、こうして毎年開催できますことは、大変有難いことと感謝しています。

平成二十三年四月より住職と副住職も書道の稽古を始め、三年目の春を迎えます。先代の一番古いお弟子さんで、現在は産経国際書会顧問としてもご活

躍しております三上錦水先生にご教授を頂いております。いざ始めてみると思うようにいかず、親子共々「こんな事なら先代が元氣なうちに少しでもやつておけば良かった」なんて口にしても後の祭りです。



「楷書は本当に難しい」

そんなまだまだ未熟な身ではありませんが、先生の「誰でも最初は恥をかい上達するものよ」というお言葉に押しされ、今回の書展に初出品した次第です。書家であった先代を身近に見てきた訳ですが、見るとやるでは大違いで、今さらに書道の奥深さを知った思いです。



「三上錦水先生と副住職」

新年号からの寺報に「書への誘い」として、私が担当で先代の作品を紹介するコーナーが始まりました。これまでに残してくれた作品とその解説なども引用しながら、書を少しでも親しめるような内容にしたいと考えておりますので、これからもどうぞご覧ください。

寺からのお知らせ

この度寺報「雲晴」を綴れる専用ファイルを作成し、檀信徒の皆様差し上げております。お彼岸など寺にお参りの際は、必ずお寄り頂きお持ち帰り下さるようお願いいたします。

施餓鬼法要のご案内

当山の施餓鬼法要を五月十四日(水)に厳修いたしますのでご予約下さい。ご案内につきましては、あらためて四月に発送いたします。

◆浄土宗一口メモ◆

「浄土宗の本山について⑧」

「善光寺」

浄土宗の大本山は今回が最終回となります。「牛に引かれて善光寺参り」で有名な長野の善光寺は、現在浄土宗大本山大本願と天台宗大本山大勧進という二つの機構によって運営されています。創建は奈良時代と古く、大本願は代々皇族の尼公上人が法灯を継がれている尼僧寺です。

本尊の阿弥陀如来は多くの信仰を集め、江戸時代には出開帳なども盛んに行われ当時も大変に賑わっていたようです。現在の尼公さまは、善光寺第百二十一世 鷹司誓玉 大僧正です。

(貞林院瑞正寺)